

ヴェブレンの進化論的経済学における機械論の位置*

石 田 教 子

はじめに

今日、アメリカの経済学者ヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen, 1857-1929) が制度派経済学の先駆者としてだけでなく、進化論的経済学の創始者の一人として位置づけられることに疑問をもつ者はいない¹⁾。ダーウィンの進化論の影響を色濃く受けながら既存の経済学を批判し、それを基礎にして経済学の方法論的再建を求めたヴェブレンの観点は、20世紀をとおして制度主義の理念を掲げる経済学者たちから何度となく支持を得たからである。制度の自然選択の解明を主題とし、様々な思考習慣の発生および進化、さらには人々が実際に成し遂げてきた適応のプロセスを克明に記述した点では、彼はまさしく経済社会を説明するためのアナロジーとして生物学を活用した経済学者であった。そして、こうした彼の視角が今日でもなお経済学方法論の重要なモデルの一つでありつづけていることはよく知られている。しかし、本稿はそのような一般的解釈に異を唱えるものではないが、ヴェブレンの経済学方法論がより広がりのある視角を持ち合わせていたこ

と、そしてそれが時とともに多少の変化を経ていった事実を示す。その場合に一つの論点となるのが、彼の機械論に関する見解である。

経済学方法論の根底には言うまでもなくそれが依拠する科学論がある。ヴェブレンの場合も例外ではなく、カント『判断力批判』(1790)を主題とした最初期の哲学研究 (Veblen 1884) には推論の方法に関わる若干の論理的考察が見られ、そこでは帰納的推論によって得られる蓋然的帰結の実践的可能性が積極的に評価された (石田 2014b)。後の進化論的経済学の構想においてもこの立場は維持され、日常生活に関わる事実問題を重視する科学者の視点が引き続き強調されることとなった。一般にこの視点はプラグマティストたちと類似する視点と早くから解釈されてきたが (Daugert 1950)、周知のとおり、本を正せばヒュームの認識論の視点である。その意味では、ヴェブレンの立場は、おそらく従来考えられてきた以上にロックを始め、ヒュームおよびスミスらに見られるようなイギリス経験論の蓋然知の系譜に近いと言えるだろう。こうした点をふまえれば、彼の科学方法論的立場の生物学的側面だけを強調する解釈は表層的である。

しかし、論理的側面が彼の科学論的立場のすべてを表しているわけではない。進化論的経済学の方法を説明する上で生物学のみならず物理学や化学を例証している点では、むしろヴェブレンの主張は科学一般を対象とするような論理的側面をもち合わせているが、後述するようにそれはより広い観点からなされた主張であった。例えば、彼は科学史を展開することで方法について論じる手法を採ったが、そこでは石器時代から現代に至

* 本論文は JSPS 科研費 25885074 の助成を受けた研究成果の一部であり、第 18 回進化経済学会における研究報告 (金沢大学, 2014/3/16, 企画セッション「旧制度学派の経済学構想: 現実を捉える方法の追求」) のために準備された発表論文 (石田 2014a) の改訂版である。

1) 本稿では institutional economics および evolutionary economics の訳語として「制度派経済学」および「進化論的経済学」という呼称を採用したが、それは本研究がヴェブレンの経済思想の学史的な研究であることを意識してのことであり、原語で表される範囲を狭める意図はない。

るような壮大な文明史的考察が前提とされていた。科学を文明史とともに論じることの意味は何か。それは、科学的知識を文化の一部として歴史相対的に理解することを意味している。したがって、ヴェブレンの関心は第一に科学的知識が形成される歴史のプロセスの跡づけに向けられたし、経済学という学問の領域がどのように設定されるべきか、言い換えれば、経済学者の視点がどこに向けられるべきかという諸問題にも跨がっていた。本稿は、このような視点から、進化論的経済学の原点であるヴェブレンの経済学方法論の再評価を試みる。

主に対象とする一次資料は、1890-1900年代に断片的に発表された経済学方法論に関する諸論文である。また、この期間のヴェブレンの文明史的考察を補足および敷衍し、後の経済思想全体との関係を俯瞰するための資料として『製作本能と産業技術の状態』(Veblen 1914)や『技術者と価格体制』(Veblen 1921)などの検討も行う。

論述の構成は次のとおりである。第Ⅱ節では、ヴェブレンの科学史の論法を確認しながら、彼の進化論的経済学の機械論的方法論の核心がマター・オブ・ファクトを重視する科学者の精神習慣にあったことを示す。第Ⅲ節では、彼の文明史的考察に焦点を当て、科学的知識の根底にあるマター・オブ・ファクトの観点が湧き出でる源が産業的生活であったことを突き止める。古典派経済学の目的論的側面を批判したヴェブレンは、経済学という科学から実践的問題解決の領域を切り離したように見えるが、実際には産業技術の進歩とともに進化する科学という歴史観に依拠する限り、経済学の実践的性格をより根本的なレベルで前提していたと考えられる。第Ⅳ節では、彼の科学史と文明史とを統合的に把握する鍵が彼の人間本性論にあることが明らかにされるが、両方の文脈における機械論の評価には揺れがあることを示す。そして、以上の解釈を基礎にヴェブレンが理想としたであろう経済社会のヴィジョンの抽出を試みるのが最後の第Ⅴ節である。

進化論的経済学の基礎にあるとされた機械技術由来の精神習慣は科学論の文脈ではひたすら肯定的な意味を与えられていた。それにもかかわらず、文明史的考察に目を転じると、それはつねに積極的な意味だけを割り当てられたわけではなかった。ヴェブレンは、1914年の議論以降、機械の論理が人間の本性とは相容れないという重大な言説を差し挟むようになったからである。このことの含意を押し広げるなら、機械技術由来の精神習慣だけでは人間の本性にかなう経済社会を構築しえないということになるかもしれない。あるいは、機械技術由来の精神習慣だけではビジネスの論理が通底する現代の営利企業体制を乗り越えることはできないということになるかもしれない。仮にそうだとすれば、彼自身の方法論的立場から導かれる帰結として、そのような経済社会を希求するためには人間の本性との調和という問題に折り合いを付ける必要が生じるだろうし、進化論的経済学の機械論的方法も何らかの追加的原理を必要とするだろう。晩年のヴェブレンが社会改革の希望を託した主体は“科学者”——それゆえ進化論的科学家——ではなく“技術者”であった。あれほどまでに経済学を科学として再建することに必死であったヴェブレンが、浪費なき経済社会のユートピアの指導者としてなぜ“科学者”ではなく“技術者”を選んだのか。この論点はヴェブレンの経済思想の学史的 연구のみならず、進化論的経済学という枠組みを修正ないし発展させていこうとするすべての思索にとって重要な示唆を与えるものと思われる。

I 進化論的経済学とマター・オブ・ファクト

一般に進化論的経済学という呼称を耳にしたとき、私たちは直ちに生物学を連想する。しかし、ヴェブレンにとっては、それはその呼称以上に広い内容を含んでいたように思われる。進化論的科学家としての経済学の再建の必要性を声高に訴えた論文「経済学はなぜ進化論的科学家ではないのか」

(Veblen 1898) や同時期の経済学史的考察では、確かに生物学と経済学のアナロジカルな関係が強調された。だが、どの論稿においても強い論調が保たれたわけではなく、例えば、進化論的科学の方法の例証が「無機的な化学のような非進化論的科学」(Veblen 1899-1900, 84) にまで及んでいたり、科学史上の観点の変化を表すためにダーウィン以前および以後という表記を用いるのは目安であり、ダーウィン以後の科学はダーウィンないし生物学の理論それ自体を指すわけではないという断り書きが付いたこともあった (Veblen 1908, 36)²⁾。さらには、理論物理学、数学的関数概念、光学、イオン理論、放射性質に関する考察 (Ibid., 33-36n) などにも例に挙げられたほどであったから、進化論的科学的性格に関する彼の的方法論は、文脈によってはより一般的な科学の方法を示唆していると受け取ることさえ可能であった。進化論的経済学の提唱者という彼の肩書きからは想像しえないが、彼の科学の定義はこのように曖昧であった。彼自身が「厳密に経済学を含む社会科学および政治科学がどのような点で進化論的諸科学に達していないかということはそれほど明確ではない」(Veblen 1898, 57-58) と述べていたことを思えば無理からぬことであろうし、厳密な定義は彼の目的ではなかったということになるだろう。

そうだとするとその内容を探ろうとするときに手がかりになるのは Veblen (1898) である。そこでは、その方法が事実の収集に徹する歴史学派的な「リアリズム」(Ibid., 58) とは異質であることが強調されただけでなく³⁾、「精緻な理論体系」(Ibid., 58) でなければならないことが高らかに謳われている。こうした主張は当時の時代背景を考慮すればそう理解しにくいものではない。経

済学方法論争は 1870 年代以降に激化したが、ヴェブレンは時期的には論争以後の経済学者であり、いずれかの陣営を選ぶというよりは両面批判の腕を試された世代の一人であったからである。ともあれ彼によれば、進化論的科学的プロセスないし継起、換言すれば、終わりなき「累積的な因果関係」を扱う理論でなければならない。したがって、新旧古典派経済学のように「正常であることや自然的であることに関する諸法則」を導出した「必然的にすべての物事が向かう諸目的に関する前提観念」(Ibid., 65) を払拭しきれないようでは、ダーウィン以前の疑似科学でしかないということになる。進化論的科学的という旗印の下で行われたこうした批判は、生物学史的文脈で理解された目的論批判と大変相性が良かった。

ただし、歴史学派的なリアリズムは却下されたものの、ヴェブレンが突き詰めていった立場もある種のリアリズムであったことを見落とすことはできないだろう。というのは、ヴェブレンの進化論的経済学において、マター・オブ・ファクトの観点がその核心をなしていたと考えられるからである。彼が繰り返し強調したのは、近代科学が「事実即する」観点に導かれている点、そして科学のそうした性格が「大雑把に言って『進化論的』と特徴づけられてきた」(Veblen 1899-1900, 84) ということであった。近代科学の方法は進化論的科学的な方法や事実即する観点とおおむね同一視されている。もっとも、進化論的科学的や進化論的経済学という呼称は 19-20 世紀転換期には多用されたが、その後この形容自体は影を潜めていくことになった⁴⁾。

そして、ヴェブレンの科学観を知るためのもう

2) 進化論とヴェブレンの関係を取った諸研究のサーベイについては、拙稿石田 (2009) を参照。

3) ヴェブレンをアメリカ版歴史学派的の一人と位置づける Schumpeter ([1954] 1997) や Robbins (1984) の解釈は正確ではない。この点については、田中 (2002) および高 (2004) を参照。

4) ヴェブレンの叙述全体を見ると、事実即する観点ないし前提観念 (matter-of-fact point of view or preconception) (Veblen 1899-1900, 100)、事実即した知識の科学的探究 (scientific quest of matter-of-fact knowledge) (Veblen 1906, 21)、事実即した一般化 (matter-of-fact generalisations) (Veblen 1908, 41) というほぼ同義の表現の方が、進化論的 (evolutionary) という形容に比べて圧倒的に多い。

一つの手がかりは彼の科学史的考察である。科学史を描くことによって、一方では正統派経済学の欠点を浮き彫りにしながら、他方ではそこから進化論的経済学の意義を逆照射していくのが彼の手法であり、まさしく経済学史そのものがヴェブレン流の進化論的科学研究対象とされていた。ここでは二つの系譜の観点が絡み合う様子を記述することにより、さまざまな時代の知識体系が克明に跡づけられたが、ヴェブレンによれば、二つの系譜とは次の観点を指す (Ibid., 100)。

- (a) 事実即する観点 (matter-of-fact point of view)
 (b) アニミズムの観点⁵⁾ (animistic point of view)

ヴェブレンによれば、(a) は「因果的な継起や相互関係の議論」をもたらすのに対して、(b) は「目的論的な継起や相互関係の議論」をもたらす。(b) は、自然神学の世界観などに見られる目的論、未開人のアニミズム、古代の神話に見られるような擬人論的な精神態度であり、古典派経済学の予定調和的な世界観も (b) の名残をとどめる議論の一例と見なされた。もう一方の (a) は科学者の精神態度に該当し、因果関係の解明という大役が割り当てられている。そして、こうした議論から言えるのは、進化論的科学的観点が (a) のマター・オブ・ファクトの観点からの因果論的あるいは機械論的な推論に該当し、(b) の目的論的な推論とは明確に区別されていたということである。ヴェブレンは、こうした経済学史を兼ねた科学史を何度も執筆した⁶⁾。

⁵⁾ アニミズムは、イギリスの文化人類学者タイラーの著『原始文化』(1871)を所出とする概念である。

⁶⁾ 後のいくつかの論稿でもおおむね同じ手法により科学史が描かれた。Veblen (1906)では、事実即した知識とプラグマティックな知識の関係が論じられている。Veblen (1908)では、プラグマティズムという用語は姿を消すが、その代わりに事実即する一般化とアニミスティックな知識の関係が再論された。ただし、二つの知識領域は対抗関係にあるのみならず、時として相関関係を持っていることに注意しなければ

ただし、知識を二つに区分する視点自体は珍しいものではない。例えば、そのような区分はロック、ヒュームおよびカントにも見られる。ロックには蓋然知と真知の区別が見られるし(只腰 1984, 6-7)、カントには理論理性と実践理性の区別や機械論と目的論の区別などが見られる。だが、この時期のヴェブレンの区別の出所はおそらくヒュームである。同じ文脈におけるヴェブレンのヒューム評価はすこぶる高く、「あまりにもモダンすぎる」(Veblen 1899-1900, 97)のために同時代人からはまったく理解されえない人物という好評を受けたほどであった。

彼〔ヒューム——引用者〕が支持した観点や方法の特性は、時には批判的態度、また時には帰納的方法、そして時には唯物論的もしくは機械論的方法、さらにあまり適切ではないけれども、歴史的方法と呼ばれてきた。その特徴は事実問題 (matter of fact) の強調にある⁷⁾。(Ibid., 97)

ヒュームに対する特徴づけは以上のように多義にわたったが、最重要の論点はマター・オブ・ファクト——事実問題——であったと言える。Hume ([1748] 1999, 115 / 訳 32) は道徳的推論 (moral reasoning) ないし事実問題と存在に関する推論

ならない。ヴェブレンは好んで二分法を用いたが、それぞれの対概念はつねに排他的であるとは限らず、相互補完的であることが多かったからである。彼が描き出そうとしたのは、二つの知識領域が混ざり合っ一つの知識体系を形成したときの両者の濃淡ないし強弱だったと考えられる。さらに、Veblen (1914)などでは、十分理由の原理 (principle of sufficient reason) から作用原因の原理 (principle of efficient cause) への移行も論じられている (Veblen 1914, 323 / 訳 264)。

⁷⁾ このような文脈では、こうしたヴェブレンの特徴づけがあくまでも彼独自の形容であることに注意しなければならないだろう。例えば、ヒュームが支持した観点が「帰納的方法」であるというのは、厳密にはヴェブレンの解釈であり、ヒューム自身の論点ではない。

と、論証的推論 (demonstrative reasoning) なしい観念の関係に関する推論を区別したが⁸⁾、彼は日常生活の実践や経験に関わる前者の推論に力点をおいたと言われている。ヴェブレンによれば、ヒュームは「日常の物事の推移についての一連の経験的叙述の一般化を、現象の目的論的な説明に付け加えること」には決して甘んじなかった (Ibid.)。このような評価から窺えるのは、目的論の対義語としてのマター・オブ・ファクトがヴェブレンの進化論的経済学の核心をなしていたということである。

彼のこうした科学史的位置づけからはどのような科学者像を垣間見ることができるだろうか。ヴェブレンは、「政策 (policy)、功利 (utility)、善悪 (better or worse)」(Veblen 1906, 19) に関わるような知識は科学とは別の知識の領域に属すと考えた。したがって、「神性や法律、および、外交、企業戦略、軍事および政策論に係る領域における訓練」(Ibid., 20) は科学的精神とは領域を異とするし、「法学や政治学」のようなプラグマティズムとも区別されなければならない (Ibid., 21)。このロジックに従えば、科学者である経済学者は上記のような諸原理とは別の領域に知識を形成しなければならないということになるだろう。

人間はいつでもどこでも何かを行おうとするという意味において、経済的行為は目的論的である。… [改行] そのことは、研究者によって、あるいは研究者たちのコンセンサスによって価値があるとか、適切であると思われるあらゆる目的にそれが向かう、あるいは向かうべきだという意味において、目的論のプロセスであるかもしれないし、あるいは違うかもしれ

れない。それがそうであるかどうかは本研究が関わらない問題であり、また進化論的経済学が無視しなければならない問題である。(Veblen 1898, 75-76)

このように、ヴェブレンにおける科学者は、自然神学的な目的論に対立するのみならず、倫理的、道徳的および政治的な構想への関心をもことごとく捨て去るような科学者であった。進化論的経済学者は個人的な価値観を科学的考察に差し挟むことは許されないのである。そして、彼にこのような言説が頻出するからこそ、「倫理的相対主義者」(Samuels 1990) および「科学的ニヒリスト」(Davis 1945) というヴェブレン像が信憑性をもってきたと考えられる。こうした彼の立場は、経済学から価値判断を分離するのは不可能であるからこそ価値前提を明示した上で議論を進めるべきだとしたミュルダールのような立場とはきわめて対照的である。だが、ヴェブレンのいう科学者は、倫理的、道徳的ないし政治的な構想のすべてを切り離した上で、ただ時計の動きをひたすら記述しつづけるような科学者を意味していたのだろうか。古い用語を借りるなら、そのような方法論的立場は機械論と呼ばれてきたが、ヴェブレンの進化論的経済学の基本的立場は機械論であったと特徴づけるのが正確なのだろうか。

上記の引用を今一度眺めるなら、冒頭の一節が目を引きはざである。人間は目的論的であるという主旨のことは、実はヴェブレンがさまざまな著作で一貫して強調しつづけた論点であった。彼によれば、「あらゆる本能的行動は目的論的である」が、その中でも特に「人類の物質的福祉に直接に貢献する」本能的傾向は「職人感覚 (sense of workmanship)」と定義されている (Veblen 1914, 31, 25 / 訳 26, 22)。そして、この職人的な製作の本能こそが「人類の生活を獣類的段階から人間の段階にまで引き上げた」本能にほかならない (Ibid., 37 / 訳 30)。科学が目的論的観点によって進められるべきではないという彼の主張は、人

8) ヒュームの知識区分については前出の只腰 (1984) の他、一ノ瀬 (2004) の解説も詳しく、一ノ瀬は前者を日常因果、後者をデザイン因果と呼び区別している。

間が目的論的な存在であるという事実そのものの否定ではなかったのである。それゆえに、進化論的経済学は人間行為を主題とするが、その場合に量的な範疇のみならず、目的論的な範疇にも視野を広げなければならないという一見両義的にも見える議論を、彼は繰り返して主張することとなった⁹⁾。そして、目的論的な範疇とは「制度的変数」(Veblen 1909, 242)にほかならず、より具体的には、人間の行為を外側から制御する習慣や慣習とともに、それを内側から突き動かす本能や性向を包含していた。この論点を積極的に肯定するがゆえに、経済学の領域に対するヴェブレンの説明は曖昧模糊としている。領域の侵犯を躊躇なく禁ずるのではなく、単に思考の停止を求めているだけだからである。そこに映し出されているのは、冷淡非情な科学者の姿というよりは、本質的に領域を侵犯しがちである人間的な科学者が禁欲しようと苦心する姿であるように見える。ここには古くはカントにまでさかのぼれる大きな問題が横たわっているように思われる¹⁰⁾。ヴェブレンにとって、機械論である進化論的経済学は、人間の行為が本質的に目的論的であるという彼自身の人間本性論とどのように両立するのだろうか。

II 産業技術の進歩と科学的知識の起源

20世紀の初頭にG. E. ムーアが自然主義的誤謬という用語を用いて行ったような批判を、ヴェブレンはそれに先駆けて繰り返し行っていた。自然であることに正常であることを読み取り、それを正しいことと読み替えれば、そうした経済理論は科学的知識とは言いがたい。すでにヒュームが18世紀に警告したとおり、ありもしない道を通

て事実の領域から規範の領域へと歩みを進める誤謬を犯すこととなる。ヴェブレンはそのような経済理論は疑似科学であり、それゆえに古き目的論の残滓と糾弾したのであった。

しかし、この論点を徹底的に押し出した彼が政治科学および社会科学を「医学」になぞらえたG. V. ラプージュの言葉に共感していたこと(Veblen 1898, 56)はあまり知られていない。19世紀末期に、ラプージュは文化人類学が起こす方法論上の革命が、細菌学が医学に対して起こした革命のようなものとなるだろうと予想した。ヴェブレンの論文「経済学はなぜ進化論的科学的ではないのか」は、このラプージュの言葉の引用で始まっている。彼にとって、医学のような実践的領域が経済学に当たるのか、あるいはそれ以外の何かであるのか、その答えはこの段階では明らかではない。しかし、事実の領域と規範の領域をつなぐ道が存在しないとしても、事実の領域から実践の領域へと向かう道がすべて閉ざされていたわけではないのかもしれない。ヴェブレンの文明史的考察は、この一見パラドキシカルに見える彼の立場を解き明かす鍵であると考えられる。

そもそもなぜ経済学方法論と文明史的考察を突き合わせる必要があるのだろうか。ヴェブレンの進化論的経済学という構想は一つの科学モデルとして現代的に高く評価されていることも手伝って、たいていの場合には独立して扱われがちである。しかしながら、科学論を扱った彼の論稿には必ず文明史的考察が挿入されているだけでなく、『有閑階級の理論』や『製作本能と産業技術の状態』などの文明史的経済理論にも必ず科学論が含まれている。経済学方法論と文明史的考察を突き合わせる手法はヴェブレン自身が意図的に選択した手法であって、筆者の独断によるわけではないということである。こうした事実をふまれば、両者を突き合わせる必要性は歴然としている。一見異質にみえるテーマはもともと一緒に論じられていたのであって、両者の再構成にこそ光が当てられなければならない。

⁹⁾ ヴェブレンの目的論の概念が二重の意味を持つことに関しては、拙稿石田(2012)を参照。

¹⁰⁾ 機械論と目的論の調停問題を扱ったカント『判断力批判』(1790)は、若き日のヴェブレンの研究テーマの一部であったのであり、すでに言及したVeblen(1884)として結実した。

それでは、知識の二つの系譜の文明史的考察の検討に入ろう。

最初に扱うのは (b) のアニミズムの観点である。ヴェブレンによれば、この観点は「人格や個性の見地」(Veblen 1899-1900, 103) から現象を認識するように強いる。例えば、好戦的な共同体に属した西洋人は飛び抜けて人格を尊重する習慣を持っていたため、人格の侵略と従属に関わる生活図式、すなわち身分制度が形成された。身分制度は人格の優劣に関する区別を事細かに教え込み、それを遵守することを人々に強いるが、こうした区別の根底にあるのは対人関係において「妬みを起こさせる比較」(Ibid., 107) を行う習慣である。しかし、この人格的な価値は「効率性」(Ibid., 107) を基礎に割り当てられるわけではない。効率性の内容については後述するが、こうした文化に属す知識体系では、真理や実質性に関わる基準はアニミスティックな傾向を帯びる (Ibid., 107)。そして、その典型的な例としてあげられているのは「占星術、錬金術、そして中世神学および形而上学」(Ibid., 109) であり、同じ観点が社会科学の思索に影響を及ぼすことによって、「自然神学、自然権、道徳哲学および自然法」として知られている教義を生み出した。したがって、これらを母体として形成されていった重農主義やアダム・スミスの経済学も (b) の知識の系譜の一端と見なされた。

他方で、(a) の事実在即する観点は文明史においてどのように位置づけられたのか。この観点は、ヴェブレンによれば、「人格的な力や注意を帰属せずに、機械的な連続性を帰属することによって諸事実を取り扱う」(Ibid., 103) ように強いる。その観点の特徴は「非アニミスティックな見地、あるいは非人格的な見地から事実を認識する習慣」(Ibid., 102) に導かれている点にある。機械的な連続性を帰属した結果、事実の問題にはつねに基層 (substratum) が存在しているが、無理に体系化が推し進められるのではなく不明確な諸事実が残されたままにされる (Ibid., 102)。そして、

(b) のアニミズムの観点が「人格や個性の見地」を源泉としていたのに対して、この (a) の観点の源泉は「産業的生活」、より厳密には「物質的な生活手段を利用するさいのあらゆる人間の経験」(Ibid., 104) であるという。

ある程度まで後者の知識の方法 [事実在即する観点——引用者] にしっかりと頼ることは、どの文化段階においても避けられないことである。というのは、その方法はいかなる産業的効率性 (industrial efficiency) にとっても不可欠だからである。心理学的に言えば、すべての技術的なプロセス、すべての機械的な工夫はこの根拠に基づいている。この思考習慣は、産業的生活から必然的に生じる選択的な帰結であり、実際、物質的な生活手段を利用するさいのあらゆる人間の経験から必然的に生じる選択的な帰結である。(Ibid., 103)

科学者の観点が純粋に論理的な推論ないし理性の能力と考えられているわけではないことは注目すべき論点だろう。本稿がヴェブレンの方法論を論理的側面に引きつけるのを避ける理由はここにある。科学者の事実在即する観点は、純粋な理性的推論ではなく、むしろ生活の必要を満たすという人間の根本的な目的意識に導かれて形成されてきたという歴史観が示されている。これは、論理的視点というよりは科学技術の進歩を軸とした文明史的視点であり、ここには科学者の観点のみならず、人間の本性そのものを根底から解明しようとする問題意識が見て取れる。

そして、このような視点から、ヴェブレンは文明の発展に関する次のような一般化を行っている。その一般化とは、文化が高度になればなるほど、人間の思考や知識を形成している機械論的な観点の領域は広くなるというものである。その理由は、そうした文化では産業的効率性にますます

依存するようになるからである。ヴェブレンはこの規則が完全な一般性を持つとまではいえなくとも、かなりの程度まで有効であり、観察によって裏づけられうる規則であると述べている (Ibid., 104)。先進の産業社会の人々は機械論的な事実を無視することには耐えられないし、そうした機械論的な事実は人々が暮らしを切り拓いていくために不可欠である。したがって、そのような社会では、人格や個性を重んじる (b) のアニミズムの観点は次第に影を潜めていくこととなる。

結局のところ、何もかもが言い尽くされた後でも依然本質的であるのは、産業の組織が発展し、その効率性が改善されると、選択と適応によって、機械論的、言い換えれば公平無私の事実認識の方法への依拠がいっそう増えざるをえないということである。(Ibid., 105)

このように、文明の発展と産業技術の進歩との間にはある種の平行関係が想定されている。そして、機械論的な事実認識、すなわち科学の発展も産業技術の進歩のプロセスに依存しているということになる¹¹⁾。

ヴェブレンは、科学の基礎として機械論的枠組みを採用する。だが、彼はカントのように普遍的な理性の原理を前提としたわけではなく、ヒュームのように日常生活の営みに科学の源泉を見いだした。ヴェブレンによれば、「人間の問題に関する裏側とまでは言わないまでも、平凡な側面の強調」(Ibid., 96) がイギリスに、そしてヒュームに

見られる。この人間の問題ないし平凡な側面に対する眼差しこそがマター・オブ・ファクトの観点であることは言うまでもない。真理の発見を担うのが科学なのではなく、人間が日常生活の実践的必要から育んできたものこそが科学の営みであるというこの主張は、一見するところ、価値中立的であろうとする進化論的科学の観点とは相容れないようにも見える。しかし、彼の文明史的考察と突き合わせながら科学論を読み直すことによって浮き彫りになるのは、価値中立的であろうとする進化論的経済学者ですら、この人類史の大きな流れから独立しているわけではないという“事実”に即した歴史認識である。

このように実践の概念においては、ヴェブレンはヒュームに似ている。確かにヒュームは事実と規範の領域を区別したが、そのことにより実践の領域を削除したわけではなかった。彼は哲学史上初めて“事実問題”の領域に焦点を当て¹²⁾、科学の対象を原因と結果の関係に定めたと言われている。

¹²⁾ この哲学史上の解釈が正しいかどうかは別としても、ヒューム自身は自らの立場をそのように位置づけていた。彼は、「事実問題」という人間理性の対象が「古代人によっても近代人によってもほとんど開拓されてこなかった」(Hume [1748] 1999, 108-09 / 訳 23) と考えていたのであり、自らが初めて着手する研究領域であることを強く自負していた。Oxford English Dictionary (2013) によれば、事実問題は本来法律用語であり、真偽の疑わしい事実に関する司法上の質疑主題を指したが、転じて、意見 (opinion) や見込み (probability)、推理の対語である事実の領域を意味するようになった。

ただし、ヴェブレンとの関係で付記しておきたいのは、日常生活への視点を重視するこの認識論的立場の最初の表明は、若き日のカント研究 (Veblen 1884) であった点である。もっとも皮肉にも当のカントにとっては、「ロックが試みた生理学的な導出は事実問題 (quaestionem facti) に関わるものだから」(Kant [1781] 2004, 166-67 / 訳 155) 考察に値しないのであった。ヴェブレンのカント論に、後の経済学方法論において頻出する「事実問題」という概念が出現しないのも当然であろう。彼のテキストに「事実問題」や「習慣」といったヒューム的な概念が現れるのは 1890 年代後半の科学論的議論以降である。

¹¹⁾ 当時の正統派経済学の大家マーシャルの進歩主義的な歴史観が「滑らか」(Veblen 1899-1900, 173) すぎるとい理由から、それを擬人論的な目的論にすぎないと一蹴するヴェブレンにも、このように技術発展を軸とした“進歩”の把握を見て取ることができるのは興味深い。しかし、ヴェブレンのこのような進歩観が進歩主義的ではない理由は、次節で論じるとおり、機械の論理が本質的に人間の本性とは相容れないからなのである。

るが、周知のように、原因と結果をつなぐ接続の必然性には疑問を付すこととなった。とはいえ、そのヒュームにおいてすら、「事実問題や存在についての我々の推論はすべてこの関係〔因果関係——引用者〕を基礎にしている」のであり、「すべての科学の唯一の直接的な効用は、未来の出来事をその原因によって制御し規制する仕方を我々に教えること」(Hume [1748] 1999, 145 / 訳 68-69) であった。

そして、後にヴェブレンが強調するように、産業技術の状態は「集団生活に関わる事実」であって、決して「個人的ないし私的な才能や新機軸に関わる事実」ではない。それゆえに、技術的知識は「公共資本 (common stock)」であるとともに「活動体 (going concern)」にほかならないということになる (Veblen 1914, 103 / 訳 88)。ヴェブレンにとって科学が、神や自然が与える究極的な真理の追究を意味しないことは明らかであったが、それは、ひたすら事実を収集したり、機械的な連続性だけを記述したりすることを意味しているわけでもなかった。確かに、彼は、科学者たちがコンセンサスによって価値や適切さに関わる実践的目的を設定することを消極的に捉えていたが、たとえそうだとしても、平凡な人々が物質的な生活手段を利用することにより、日常生活を主体的に営むための実践的指針を科学が与える可能性を否定したわけではなかった。ヴェブレンのマター・オブ・ファクトの観点は科学的な事実認識に徹することを求めながらも、その出自を訪ねるなら、少なくともその観点が生じる大本の出発点——物質的な生活手段を利用し、産業的効率性を高めようとする人間の営み——においてすぐれて実践的な動機に誘われていたからである。この点は、彼の進化論的経済学の方法論の核心に関わっているにもかかわらず、その文明史的考察を参照しなければ容易に見落とされる論点である。そして、この論点を前提とするなら、ヴェブレンの進化論的経済学が素朴な機械論と同義ではないことが浮き彫りになる。彼の科学論は、このような仕

方で文明史的考察を前提しており、そこには次節で見るような彼独自の人間本性論が埋め込まれているのである。

Ⅲ 機械と人間：すれ違う二つの原理

普遍妥当的な方法論的原理の存在を明示しなかったという意味では、ヴェブレンは間違いなく相対主義者であった。既存の経済学が方法論的に時代遅れだという 1898 年の論文「経済学はなぜ進化論的科学的ではないのか」の主張は、表面上は、読者に対して、経済学が採用すべき方法を提案しているような印象を与える。だが、彼のテキストを注意深く読むなら、彼が規範となる方法論的モデルを提示したと断定できる文脈を見いだすのは非常に難しい¹³⁾。それどころか、「事実」に即した知識を中核にもつ近代西洋文化が、例えば古典ギリシア、中世キリスト教国、ヒンズー教国、あるいはプエブロ・インディアンのような他の文化図式に比べて優れているか劣っているかは分からない (Veblen 1906, 29) というのが、結局はヴェブレンが生涯貫いた立場であったと言えるだろう。経済学も科学の一部門であり、絶えず進化する可能性はつねに開かれているからである。

こうした歴史観からすれば当然の成り行きとも言えようが、科学の進化論的性格や生物学的アナロジーの重要性に関しては、ヴェブレンは次第にその語気を和らげていった。最も象徴的なのは、処女作『有閑階級の理論』(Veblen 1899) の副題

¹³⁾ この論文における彼の進化論的経済学の提唱が、後続の研究者たちによってさまざまに解釈された経緯に関しては、例えば Lawson (2002) を参照。ローソンによれば、この主張は既存の方法論を廃し新たな方法論を構築すべきだとする積極的な提案としてのみ解釈されたわけではなかった。W. サミュエルズらポスト・モダニストの解釈やローソン自身の解釈などきわめて多様なアプローチが導出可能であることが示されている。

「制度の進化に関する経済学的研究 (An Economic Study in the Evolution of Institutions)」から「進化」の文字が削られたことであろう。削除の正確な時期は不明だが、1902年版の副題はすでに「諸制度の経済学的研究 (An Economic Study of Institutions)」に変わっているという¹⁴⁾。だが、こうした意識の変化により、彼の出版物から科学史や経済学方法論の議論自体が減ったわけではなかった。「進化」や「進化論的」という表記自体はあまり出現しなくなったものの、科学論への関心は生涯続いたからである¹⁵⁾。ただし、科学ないし科学者の目的に関しては相変わらず曖昧な表現にとどまり、大筋では、それらが「進化論的経済学が無視しなければならない問題」であるという最初の立場が貫かれたと言ってよいだろう。

この問題に対する彼の曖昧な立場表明としては、科学と技術の関係を積極的に論じている1906年の論文の言及も好例である。

科学者の観点から見ると、科学的探究の目標や意図に関する限り、機械製の研究の規準 (machine-made canons of research) のもとで得られる知識の多くが実践的に利用されうるということは、まったく偶然の実体のない符合である。自然の諸力が利用されるプロセスの制御にそれを応用することによって、この知識の多くは有益であるし、有益であるように形成されるだろう。有益な諸目的のためのこの科学的知識の利用は技術 (technology) である。それは、その見地が本来の機械

産業に加えて、工学、農業、医療、公衆衛生および経済的な諸改革のような実践の諸部門を含む広い意味においての技術である。科学の諸理論がこれらの実践的諸目的のために利用されうる理由は、これらの諸目的が科学的探究の領域内に含まれるからではない。これらの有益な諸目的は科学者の関心の外にある。そのことは、彼が技術的改善を目指すということ、あるいは、彼が技術的改善を目指すということではないのである。彼の探究は、プエブロ・インディアンの神話作成者と同じぐらいに「自在 (idle)」である。しかし、そうした指針の下で彼が研究を行う妥当性の規準は、近代技術によって、その要請への習慣化をつうじて強いられる規準である。それゆえに、彼の帰結は技術的な目的に利用可能なのである。(Veblen 1906, 16-17)

ここから分かるのは、科学的成果が技術として実践的に利用可能であることが否定されているわけではなかったことである。しかし、それが実践的に利用可能であるのは、科学と技術が領域を共有しているからではないし、科学者がそのような目的意識を有しているからでもない。それは、技術が生み出す規準が習慣化のプロセスをつうじて科学者の精神を形成してきたからこそ可能になった、というのがヴェブレンの説明となる。とはいえ、それらが「工学、農業、医療、公衆衛生および経済的な諸改革のような実践の諸部門」に利用可能であることを積極的に認めてはいるものの、科学と技術の具体的な連携のあり方に関しては依然としてオブラートに包まれたままである。

科学と技術は何らかの仕方では連携しているが、はっきりとしているのは、その共通の基盤が近代以降は機械技術であるという論点であろう。科学史的文脈においてこの点で目につくのは、機械が生み出す論理がことのほか肯定的に捉えられてい

¹⁴⁾ Dorfman ([1934] 1972, 323 / 訳 457) は、1912年にマクミラン社から廉価版が刊行されたときに副題が変更されたと記載しているが、高 (2013, 435) によれば、1902年の初版増刷時にはすでに変更されていた。1925年にジョージ・アレン&アンウィン社から英国版が出版されたが、この時も変更後の副題であった。

¹⁵⁾ 最後の経済学的論文「予測可能な未来における経済理論」(Veblen 1925) も経済学方法論に関する論文として分類できる。

る点である。科学は因果関係を捉えようとする点で機械論の枠組みを基礎としなければならないが、特に、肯定的な評価と読み取ることができるのは、職人の技術との対比において機械の技術に由来する観点がクローズアップされる文脈である。同じ文脈にある Veblen (Ibid., 13-16) の議論はそのような対比の典型である。

職人の技術から機械の技術への移行は、時代的には手工業時代から機械工業時代への移行と重なり、経済学史的には、重農主義やスミスに始まる古典派経済学からダーウィン以後的な進化論的経済学への移行に対応している。ヴェブレンによれば、功績や忠義が文化的基調を定めていた封建的身分制度の時代を経て近代初期に向かうとき、職人技 (workmanship) がその文化的基調を定める重要な要因に取って代わっていった。それにより、科学者たちの概念も職人のイメージで描かれるようになる。すると、「弁証の一貫性や権威ある慣例」(Ibid., 14) よりも「因果律」(Ibid.) が重視されるようになるが、職人の技術をモデルとするような因果の理解は擬人論的な性質を帯びている点で、進化論的経済学の累積的な因果関係の理解の仕方とは依然同じではない。近代後期の科学者たちの概念も同じように職人をモデルとしているが、初期に比べ超自然的な性格は薄れていった。そして、19世紀に入るとさらなる変化が起こる。技術を象徴するアーキタイプは職人から機械に取って代わられる。科学の方法に関する“機械製”の規準は、それ以前のようにもはやドラマティックな生き生きとした物語を描くことはない。それは、不透明で、非人格的で、ただ事実 に即した因果関係を記述するだけである。機械の論理は職人の技術の論理を乗り越えたところにある科学者の新境地であり、少なくとも科学史的な文脈においてはもっぱら肯定的に捉えられていることが分かるだろう。機械の論理に従うことは経済学が進化論的科学的に進化するための条件であり、ダーウィンの進化論は、それと同じように生物学研究が「純粋に機械論的な構想(purely mechanistic

conception)」(Veblen 1914, 328 / 訳 267) に足掛かりを見いだした象徴的事例とされていた。

しかし、文明史的な文脈に目を転じると、機械の論理に対する評価には若干の温度差を感じ取ることができる。そこには消極的な意味が多少付加されていったように見えるからである。

それ [現在の産業技術の状態によって与えられる訓練——引用者] は、…事実 に即する訓練であり、機械過程の論理の訓練である。…しかし、そのような意図はせいぜいのところ機械過程の論理に相応しいものであって、良かれ悪しかれその訓練に服している人々の人間本性の生来の気質 (native strain of human nature) に適合するものではない。(Ibid., 318 / 訳 260)

遺伝に関する定説によれば、文明人はその生来の素質 (native endowment) によって、適度に進んだ野蛮状態の下での生活に最もよく適しているはずであるが、そういう状態を機械技術は認めよう としないだろう。(Ibid., 320 / 訳 261)

肉体的にも精神的にも、人類に生来の許容限界 (limit of tolerance native to the race) は、機械技術が止めどなく酷使する純然たる物質主義や絶え間ない機械的ルーチンを下回るのである。(Ibid., 321 / 訳 262)

このように、1914年の著作『製作本能と産業技術の状態』では、機械の論理と人間の本性の不調和に関する議論が散見されるようになった。これは初期の科学的論稿では扱われていなかった問題である。一言で言えば、人間は科学的知識やその技術的応用のために機械の論理を追い求めるが、それにもかかわらず、人間の生来の本性はた

やすく機械に同化されるようなものではないということになるだろう¹⁶⁾。

ここには一つの大きなパラドックスが潜んでいる。科学史的文脈においては、経済学が進化論的科學の方法を取り入れるためには、職人の技術に由来する論理を捨て、自然法的な世界観から脱却し、一般的福祉の実現の理想を思い見るような想定を禁欲する必要があった。そうすることにより、科学者は純粋に機械論的な論理へと乗り換えることができるからである。しかし、文明史的な文脈に目を向けると、機械の論理は本質的に人間の本性には合致しえないどころか、人間の許容限界を超えるリスクも抱えている。後者の消極的な影響に関する指摘は重大であろう。なぜなら、進化論的経済学という方法論それ自体にも、機械の論理だけに依拠する限りは疑念が降りかかりかねないからである。さらに、見落としてはならないのは、科学史的な文脈においては時代遅れの論理とされた職人の技術が、文明史的な文脈においてはそれとは反対に人間の本性に合致する論理と評価されてい

る点である。ヴェブレンによれば、機械の技術とは異なり、職人の技術は、筋力と手を使う器用さを駆使し、どのような力を利用し、それらをどのように役立たせるかという問題に関わる点で、「人間の自然的な性向とぴたりと一致する」(Ibid., 236 / 訳 196)。このように、職人と機械という二つのアーキタイプは、科学史と文明史というそれぞれの文脈において、互いに光と影を演じ分けているのである。

産業における機械技術が発展し、人々の精神習慣がすべて機械技術由来のものとなれば、社会の物質的な生活手段の利用は最も効率的となるのだろうか。あるいは、少なくとも科学者の精神習慣がすべて機械技術由来のものとなれば、人々の日常生活に対して最善の実践的指針を提示できるということになるのだろうか。

1914年の議論では、初期では問題にすらされなかったこうした重大な論点が見え隠れし始めているように思われる。すなわち、機械の技術が生み出す論理がそれ自体で社会の物質的福祉の向上やそのための産業技術の改善を先導することは可能なかという問題である。ヴェブレンは、職人の技術と機械の技術では、論理の構成が大きく異なると考えていた。職人の技術は「個人的な器用さ、気配り、訓練およびルーチン」に関わる論理であるのに対して、機械の技術は「量、速度、圧力および推力」に関わる論理であった(Ibid., 241 / 訳 199)。例えば、蒸気機関の発明は、誰か一人の職人が達成するような発明とは大きく違う。職人の発明も革新をもたらすが、機械の技術が生み出す発明はある発明が客観的要素となって次なる発明をたえず生み出しつづけるような発明であり、技術的経験の蓄積をもたらす。しかし、彼は、そのような「技術的経験の蓄積はそれ自体としては産業技術の連続的な改善をもたらすには十分ではない」(Ibid. / 訳 198)という帰結に辿り着くことになる。つまり、産業技術を改善するには機械の論理が不可欠であるが、それだけでは人間は経験に基づく知識を最大限に活用することはでき

16) それ以前の萌芽的な議論としては『営利企業の理論』における機械化が近代的でない人々にもたらす不愉快に関する記述が挙げられるだろう。「機械過程の要請に生活習慣や理想を適応させることはほとんど完了していないし、訓練されていない人は本能的にそれに同調しない。最もよく訓練された人、産業都市の厳格にしつけられた人ですら反抗期というものがある。」(Veblen 1904, 15n / 訳 15n)。1906年の論文においては立論はされながらも、明確な回答は巧妙に回避されている。「上述の議論を踏まえると次のような問題が想起されるだろう。事実即ち知識の科学的探究は、正常な人間の生まれながらの知的な素質や性向とどの程度まで共鳴するのか。そして、近代文化における科学はどのような足がかりをもっているのか、という問題である。」(Veblen 1906, 21) 前者の問題については環境によって決定されるだろうという形式的な説明があるだけで、詳細な考察はない。

それから、1914年の議論についても補足をしておくと、厳密には、人間の本性が機械の論理と共鳴する道が完全に否定されているわけではなかった。例えば、機械論的な概念だけが決定的規準となる可能性について論じている文脈 (Veblen 1914, 328-29 / 訳 267-68) を参照。

ないということなのであろう。1914年の議論では明確に論じられていたわけではないが、晩年の議論では、人間の本性に合致するような何らかの別の原理が求められていった。

IV 浪費なき経済社会を求めて

初期の科学論においては、ヴェブレンは経済学が実践の問題に公然と関わることを消極的に捉え、価値や適切さに関わる科学者のコンセンサス自体を自らの問題設定から除外しようとした。しかし、それにもかかわらず、彼の文明史的考察をたどりながら、そこに埋め込まれている人間本性論に触れるなら、間接的にはあるが、彼が理想としたであろう経済社会の方向性がおぼろげながら浮かび上がってくるように思われる。その全貌を把握することは困難だとしても、ここでは次の問いをかかげてみたい。社会の物質的福祉を実現するとされた彼の経済社会像とはどのようなものだったのか。次に見る効率性に関する議論は、こうした彼のヴィジョンの輪郭を描くための格好のファインダーであるように思われる。

経済学における効率性の概念は、V. パレートの定義をもとに説明されるのが一般的であり、限られた資源を最も適切に活用することにより、すべての経済主体の経済的な満足度を限界まで高めるような基準を意味している。だが、この定義においては、基本的に満足を生み出す行為の種類、経済主体が感じる満足の質、それらの社会全体との関係などは捨象されるし、資源活用の適切さそれ自体に関する検討があるわけではない。そうした抽象的な定義と比較すると、ヴェブレンの効率性の概念は玉虫色である。おそらくそれは、効率性の善し悪しをかぎ分けるとされた人間の本能——製作本能 (instinct of workmanship) ——が、他のさまざまな本能および性向と結びつくオールマイティな性格を帯びていたことと無関係ではな

いだろう¹⁷⁾。製作本能は、職人の手際の良い作業を可能にし、浪費を非難する精神を形成するだけではなく、自社の利益だけをセルフフィッシュに追求する企業行動、さらには戦争における計画的な略奪行為を手助けしたりするかもしれない。とはいえ、それは親性性向 (parental bent) と共鳴するなら、将来の人類一般の福祉の増進に全力を尽くすだろう¹⁸⁾。ただし、本稿の第Ⅲ節で述べたように、ヴェブレンの科学論では、効率性の概念がある一つの意味に結びつけられ、科学的知識が形成されていく源とされていたことも思い出されるはずである。というのも、マター・オブ・ファクトの科学的観点は、「産業的」効率性を基礎に形成されると考えられていたからである。

産業的効率性という概念はすぐれてヴェブレン的な意味で理解されなければならない。よく知られているとおり、彼の歴史観においては、産業の概念は「企業」、「金銭」および「営利」等の対語であり、産業的効率性と言う場合、利潤の最大化だけを追求する企業者の聡明さや機敏さの意味は抜け落ち、無駄のない物質的な生産、なおかつそうした生産に従事する勤労 (industry) という意味にも引きつけられていたように思われる。とはいえ、産業的でない効率性の概念が存在するのかと言えば、この点については明確な説明があるわけではなかった。ヴェブレンは、効率管理技術者 (efficiency engineer) らの調査結果¹⁹⁾を引用しな

17) ヴェブレンは、製作本能が他のさまざまな本能と混じり合いながら、人々の思考や行為に影響を及ぼしていると考えた。彼は、複数の本能的な性向が結びつくことを「汚染 (contamination)」と表現し、本能自らが本来の性質を失う場合には「自己汚染 (self-contamination)」とも表現している。もっとも、汚染状態であっても、社会の物質的福祉を害するのではなく増進するケースもあり、中立的な意味で使われている場合もあるので注意が必要である。

18) 製作本能の多様な発現に関しては、例えば、Veblen (1914) の第1章諸論の議論を参照。

19) 出所は H. エマソン (Harrington Emerson, 1853-1931) の『操業と賃金の基礎としての効率』(Emerson 1909) である。

がら、平均的なアメリカの産業における防止可能な浪費が時には90%にも達するという予測に注意を促している。効率管理技術者は企業に雇われた専門家であり、浪費と非効率に関する報告を行うことを職務としていた。そして、彼らは、企業経営者が理解できるように「価格と利潤」の観点から調査結果を報告してきたが、経営者たちがその意味を理解し受け入れることは少ない (Ibid., 223 / 訳 185)。そのような現状に対して、ヴェブレンは次のような持論を展開している。

もしこれらの発見が、社会全体にとっての有用性 (serviceability) という観点でなされるならば、その場合に確かめられる矛盾がどれほど大きいかにして確実な推測をする方法はない。ある所与の産業的企業が、企業者たちの純利益の代わりに、社会にとっての純有用性 (net serviceability) という点の検証にかけられるならば、多くの産業的企業がおそらくそれらの現在の産出高の100パーセント以上にのぼる浪費を示すことだろう。それは、生産しない場合以上に社会の物質的福祉にとって有害 (disserviceable) である。 (Ibid., 224 / 訳 185)

こうした文脈を考慮すれば、ヴェブレンの効率性の概念は、「価格と利潤」の観点ないし「純利益」の観点ではなく、社会全体の「有用性」という観点から考慮される概念であることが分かる。彼によれば、前者は確実に測定できたとしても、後者の「有用性」はそうはいかない。しかしながら、この測定できない「有用性」こそが、彼の効率性の概念の理解の鍵を握っているのである。このような視点は、私企業のみならず政治機構によっても測定されずにきた損失部分に光を当てようとした W. カップの社会的費用論につづる視点とも言えるだろう。そして、上記の文脈からは浪費が社会に及ぼす影響をヴェブレンが「有害」と判断

していたことをくみ取ることができる。ここで注目しておきたいのは“技術者”という主体の存在である。Veblen (1914) では上記のように簡単に触れられただけだったが、周知のとおり、それは晩年の議論の中軸となる。

上記の言説を見る限り、処女作である『有閑階級の理論』(Veblen 1899) 以来ずっと彼の関心の中心にあったテーマが“浪費”であることは明らかだろう。晩年の代表作『技術者と価格体制』(Veblen 1921) は6章から成るが、未来については多くを語らないヴェブレンには珍しく、後半の3章はすべて将来予測に当てられている²⁰⁾。企業経営と産業管理の分化が進むと、金融の将帥が企業の最終的な決定権を持つようになるが、彼らは実際の生産の現場には接触しなくなり、そのメカニズムを理解することすらできなくなっていく。それに対して、もう一つの勢力が成長していくのであるが、それが生産の実際のメカニズムに通じた技術者 (engineer, technologist, technician) である。ヴェブレンによれば、彼ら技術者は、ごく最近になって当惑しつつも「社会の物質的福祉の番人 (keeper)」(Veblen 1921, 79 / 訳 79) としての「階級意識」を持ち始め、自分たちこそが産業体制に不可欠な「参謀 (General Staff)」であると反省しはじめている (Ibid., 71 / 訳 72)。

産業体制は、これらの生産技術者によって設計され、設置され、また導かれる技

²⁰⁾ 第4章は「革命的転覆の危険について」、第5章は「変革を助長する状況について」、そして最後の第6章は「実行可能な技術者のソヴィエトに関する覚書」と題され、技術者による生産管理のあり方がかなり具体的に議論されている。ちなみに、第1章では、現代の経済社会において効率的な資源利用がなされない原因を労働者のみならず、企業と政府が行うサボタージュに求め、第2章では、機械制産業の時代ないし商業的民主主義と呼ばれる時代における産業の将帥 (captains of industry) の役割が論じられている。つづく第3章では、その後の時代の変化、すなわち、経営者の役割と産業上の専門家の役割が分化していくプロセスが跡づけられている。

術的過程の機械的に組織された構造である。これらの人々と、彼らの不断の注意がなければ、産業設備や機械装置はまさにただのガラクタとなってしまうであろう。社会の物質的福祉は無条件にこのような産業体制の当然の作用に関わっているし、したがってまた、技術者によるその体制の徹底的な制御に結びついている。なぜなら、技術者だけがその体制を管理する能力をもっているからである。(Ibid., 69-70 / 訳 70)

ヴェブレンは、商業主義の国アメリカではロシアとは異なり、近い将来に革命的転覆が起こる危険は無いことを強調した。だが、変革の芽が全くないわけではないのであり、彼はアメリカにおいてソヴィエトのようなものが生じる機会があるとすれば、技術者のソヴィエト (soviet of technicians) であるという結論に達する。それは、不在所有制の旧秩序と訣別したときに実現するとされた体制、彼の言葉から正確に引くなら、「この国の技術者によって管理される職人氣質の体制 (régime of workmanship governed by the country's technicians)」であった (Ibid., 163 / 訳 157)。

それでは、職人氣質は、技術者にとって、そして技術者のソヴィエトにとって不可欠な「観点」であったと言えるのだろうか。職人の本能、製作本能在効率性の善し悪しをかぎ分ける人間本性の一部であり、それゆえに人間は無駄や浪費を識別できるとヴェブレンが考えていたことを思えば、これは当然の帰結と言えるのかもしれない。しかし、以前の議論を振り返れば、経済学が進化論的科学の方法を取り入れるためには、職人の技術に由来する論理を捨てなければならなかったはずである。科学史的な文脈においては、職人の技術は、重農主義やスミスの経済理論を生み出すような時代遅れの論理とされていたことを思い起こす必要がある。これらはすべて彼が立場を転向させた結果であると解釈すべきなのだろうか。つまるとこ

ろ、晩年のヴェブレンは、科学者に対する期待をすっかり失い、その結果として技術者に望みを託していったのであり、かつては(科学史的な文脈において)軽視された職人の感覚や本能、製作本能在再評価されるに至ったと解釈するのが正しいのだろうか。

実際、そのことを裏づけるかのように、Veblen (1921) には、科学や科学者という言葉自体がほとんど出現しない。進化論的経済学の積極的意義を高らかに宣言した Veblen (1898) には、曖昧とはいえ近い将来に経済学が進むべき新たな道が示されていた。しかしながら、同じく経済学方法論を扱っている彼の最後の論文「予測可能な未来における経済理論」(Veblen 1925)²¹⁾の論調はずっとペシミスティックである。経済学者も、それゆえ経済理論も、政府も官僚もすべてがビジネスの論理に引きずられるほかない世界が描かれているからである。

晩年のヴェブレンにとって、進化論的経済学は無用の長物に成り下がったのだろうか。そもそも技術者のソヴィエトには経済学者は不要なのだろうか。この問いに対する回答は単純ではない。実際には、経済学者は不可欠な存在と見なされたが、技術者の一職業である顧問経済学者 (consulting economists) としてであった。彼らは、「販売術や金融取引および所得や財産の分配に関する理論研究」ばかりに執心するのではなく、「財およびサービスの生産方法および手段と考えられた産業体制の研究」に専心しなければならない (Ibid., 140-45 / 訳 140)。そして、顧問経済学者たちは、「生産上の効率、資源の経済的利用および消費財の公正な分配に関する共通の関心を基礎にして、自己選択 (self-selection) により団結しなければならない」(Ibid., 152 / 訳 147)。

²¹⁾ この論文は、健康上の理由からヴェブレン自身は欠席したが、ミッチェル (Wesley Clair Mitchell, 1874-1948) が 1924 年にアメリカ経済学会の会長就任演説を行った年次大会上で発表された論文である (Dorfman [1934] 1972, 489 / 訳 677)。

このように、晩年の議論では、価値や適切さに関わる科学者のコンセンサスが無視されるどころか、積極的に重視されるようになった。しかもそうした団結は「自然選択」ではなく「自己選択」により形成される。ヴェブレンの説明は、初期の科学論的立場に比べ相当大きな変化を経たと言っただろう。しかしながら、産業的効率性を維持することによって実現する浪費なき経済社会という福祉観、そしてそれを判断する人間の本性論に限れば、実は、彼の見解は初期からほとんど変わっていないのである。

おわりに

本稿では、これまでに、ヴェブレンの科学観ないし科学史を文明史と突き合わせながら考察し、科学の意義や科学者の役割についての彼の見解、換言すれば、彼の経済思想における機械論の位置づけを解明することを目指してきた。それにより、ヴェブレンの経済学方法論、あるいは、進化論的経済学という構想が、従来考えられてきた以上に広がりのある視角を持ち合わせていたことが示せたのではないだろうか。彼の思想の再構成に際しては彼のテキストを無理につなぎ合わせるのではなく、曖昧さや矛盾があればそのままに辿ってきたつもりである。そこで明らかになったのは、機械の論理は、経済学の方法を刷新し、進化論的経済学を作動させるための引き金であったにもかかわらず、技術者のソヴィエトによる浪費なき経済社会の運営のための切り札としては不足であったということである。機械の論理を人間の本性に見合う論理として応用するためにはもう一つ別の工夫が必要となったからである。少なくとも1898年時点の進化論的経済学の構想においては、経済学者が産業的効率性を表だって価値基準とすることは明らかに不可能であった。

科学と目的論、産業と企業、マター・オブ・ファクトとアニミズムというように、一般にヴェブレンの世界は二項対立的に組み立てられていると解

釈されてきた。だが、この解釈は間違いではないが単純すぎる。例えば、本稿において論じてきたように、ヴェブレンの世界からは二分法的視点には還元しえない複雑な確執——例えば、ビジネスの論理と、科学ないし機械の論理と、産業技術の論理の緊張関係——を見いだすことができるからである²²⁾。

その世界では、いうまでもなく金銭文化のビジネスの論理は公共善に適うものではなかった。そして、『営利企業の理論』(Veblen 1904)の結論が示したように、機械の論理はビジネスの論理を抑制ないし場合によっては解体しうる潜在力を秘めた希望の論理であった。しかしながら、だからといって機械の論理は、それだけでは人間の本性に合致するものではなかったから、浪費まみれの現代経済からの完全なる離陸という大役を担わせることはできなかったのである。企業家に飼い慣らされる現状を打破し、ビジネスの論理を拒絶しうる人間的原理が新たに、あるいは、過去の追憶のなかに探し求められなければならなかったからである。それゆえに、科学者、すなわち進化論的学者としての経済学者は、晩年のヴェブレンの理想の経済社会のヴィジョンには登場しえなかったのである。効率性の改善を産業的な視点から管理し、その上で社会の物質的福祉を向上させるための頼みの綱は、科学ではなく技術のうちに、機械の論理ではなく人間の本性のうちに求められざるを得なかったからである。

ヴェブレンの初期の提案と後期のヴィジョンには大きな揺れが見られる。これは矛盾と捉えることもできようが、しかしながら、後期の議論につ

²²⁾ 一般に二分法的な解釈の代表としてはAyres(1944)とその継承者たちの諸研究を挙げることができるだろう。それに対して、本稿の議論と必ずしも重なるわけではないが、そうした解釈を乗り越えようとする最近の邦文研究としては、例えば、ヴェブレンの関心が人間性の累積的發展、すなわち多層構造化のプロセスの解明にあったと解釈する高(2006)や、ヴェブレンの世界に三つ巴の対立を読み取る稲上(2013)を挙げることができる。

ながる足跡のように理解することもできるだろう。実践的な価値観を乱暴に、あるいは無自覚に押し出す目的論的観点を、進化論的経済学者である彼は頑なに拒絶しながらも、日常生活の細部——すなわちマター・オブ・ファクト——に眼差しを向けようとするきわめて実践的な科学者の精神態度をその基礎に据えていた。このことは、あたかも晩年の結論につづる伏線であったかのようである。もちろん、彼自身によってそのことがどれほど意識されていたかは答えの出ない問題だろう。少なくともこうした彼の経済学方法論は、推論の方法に関わる論理的議論という枠では小さすぎるし、単なる生物学的アナロジーの応用例という位置づけでも狭すぎるように思われる。

ヴェブレンの経済学方法論をこのように解釈できるとすれば、ヴェブレンという経済学者を価値に対して完全な中立性を保った純粋な科学主義者と捉える解釈 (Davis 1945, Samuels 1990) は間違ではないが、但し書きを必要とするだろう。したがって、ヴェブレンの進化論的経済学というプログラムが失敗に終わったと考え、次世代の制度派経済学者との間に断絶を見いだす位置づけ (Rutherford 1998) についても再考を要するはずである。ヴェブレンの経済学史的な位置づけは依然未確定であり、いまだに論争は絶えないものと考えられている (高 1991, 井上 1999, Hodgson 2008) が、本稿の考察から言えるのは、位置づけをめぐる考察においては「進化論的」という形容に過度に囚われることなく、彼の生のテキストに向き合い、彼が経済学方法論として提案しようとした諸論点を徹底的に洗い出すところから始められなければならないということである。

参考文献

- Ayres, C. E. 1944. *The Theory of Economic Progress*. The University of North Carolina Press. 一泉知永訳『経済進歩の理論』文雅堂, 1957.
- Daugert, Stanley Matthew 1950. *The Philosophy of Thorstein Veblen*. New York: King's Crown Press.
- Davis Arthur K. 1945. Sociological Elements in Veblen's Economic Theory. *The Journal of Political Economy* 53 (2): 132-49.
- Dorfman, Joseph [1934] 1972. *Thorstein Veblen and His America with New Appendices*. New York: Augustus M. Kelley. 八木甫訳『ヴェブレン——その人と時代——』ホルト・サウンダース・ジャパン, 1985.
- Emerson, Harrington 1909. *Efficiency as a Basis for Operation and Wages*. New York: The Engineering Magazine.
- Hodgson, Geoffrey M. 2008. How Veblen Generalized Darwinism. *Journal of Economic Issues* 42 (2): pp. 399-405.
- Hume, David [1748] 1999. *An Inquiry Concerning the Human Understanding*. Edited by Tom L. Beauchamp. 斎藤繁雄, 一ノ瀬正樹訳『人間知性研究 付・人間本性論摘要』法政大学出版局, 2004.
- 一ノ瀬正樹 2004. 「ヒューム因果論の源泉——他者への絶え間なき反転——」デイヴィッド・ヒューム著, 斎藤繁雄, 一ノ瀬正樹訳『人間知性研究 付・人間本性論摘要』所収, 法政大学出版局: 227-78.
- 稲上毅 2013. 『ヴェブレンとその時代——いかに生き、いかに思索したか——』新曜社.
- 井上義朗 1999. 『エヴォルショナリー・エコノミクス——批判的序説——』有斐閣.
- 石田教子 2009. 「進化思想とヴェブレンの経済学構想——近年の諸研究に関するサーベイ——」『紀要』39: 39-64.
- 2012. 「ヴェブレンの進化論的経済学における目的論的位置」『経済学論纂』52 (3): 111-40.
- 2014a. 「ヴェブレンの文明史における機械の論理と人間の本性」『進化経済学会第18回金沢大会発表論文集』: 374-93.
- 2014b. 「若きヴェブレンのカント『判断力批判』研究——進化論的経済学のルーツをたどる——」『経済集志』84 (2): 43-67.
- Kant, Immanuel [1781] 1998. *Kritik der reinen Vernunft*. Hamburg: Felix Meiner Verlag. 宇都宮芳明訳『純粋理性批判』以文社, 2004.
- Lawson, Tony 2002. Should Economics Be an Evolutionary Science?: Veblen's Concern and Philosophical Legacy. *Journal of Economic Issues* 36 (2): 279-92.

- Oxford English Dictionary 2013. "matter of fact, n. and adj." *OED Online*. December 2013. 2013/12/29 <<http://www.oed.com/view/Entry/115094?rskey=FaNsZN&result=2&isAdvanced=false>>. Oxford University Press.
- Robbins, Lionel 1984. *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*. 3rd ed. Foreword by William Baumol. London: Macmillan. 中山伊知郎監修, 辻六兵衛訳『経済学の本質と意義』東洋経済新報社, 1957.
- Rutherford, M. 1998. Veblen's Evolutionary Programme: A Promise Unfulfilled. *Cambridge Journal of Economics* 22 (4): 463-77.
- Samuels, Warren J. 1990. The Self-referentiability of Thorstein Veblen's Theory of the Preconceptions of Economic Science. *Journal of Economic Issues* 24 (3): 695-718.
- Schumpeter, Joseph A. [1954] 1997. *History of Economic Analysis*. Edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter and with an Introduction by Mark Perlman. London: Routledge. 東畑精一, 福岡正夫訳『経済分析の歴史』全3巻, 岩波書店, 2005-06.
- 小腰親和 1984. 「イギリス経験論における方法論的潮流とアダム・スミス」『古典派経済学研究(I)』所収, 雄松堂出版: 1-29.
- 高哲男 1991. 『ヴェブレン研究——進化論的経済学の世界——』ミネルヴァ書房.
- 2004. 『現代アメリカ経済思想の起源——プラグマティズムと制度経済学——』名古屋大学出版会.
- 2006. 「T. B. ヴェブレン——経済学の脱構築と進化論——」橋本努編『経済思想 8 20世紀の経済学の諸潮流』所収, 日本経済評論社: 1-51.
- 2013. 「訳者解説」ソースティン・ヴェブレン著『有閑階級の理論』所収, 筑摩書房: 435-60.
- 田中敏弘 2002. 『アメリカの経済思想——建国期から現代まで——』名古屋大学出版会.
- Veblen, Thorstein 1884. Kant's Critique of Judgment. *The Journal of Speculative Philosophy* 18. Reprinted in ECO: 175-93.
- 1898. Why is Economics Not an Evolutionary Science. *Quarterly Journal of Economics* 12 (4). Reprinted in PS: 56-81.
- 1899-1900. The Preconceptions of Economic Science, Part I - III. *Quarterly Journal of Economics* 13 (2); 13 (4); 14 (2). Reprinted in PS: 82-113; 114-47; 148-79.
- 1899. *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions* (TLC). New York: Macmillan Company. 高哲男訳『有閑階級の理論——制度の進化に関する経済学的研究——』筑摩書房, 1998.
- 1904. *The Theory of Business Enterprise*. New York: Charles Scribner's sons. 小原敬士訳『営利企業の理論』勁草書房, 1965.
- 1906. The Place of Science in Modern Civilization. *American Journal of Sociology* 11 (5). Reprinted in PS: 1-31.
- 1908. The Evolution of the Scientific Point of View. *The University of California Chronicle* 10 (4). Reprinted in PS: 32-55.
- 1909. The Limitations of Marginal Utility. *Journal of Political Economy* 17 (9). Reprinted in PS: 231-51.
- 1914. *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts* (IW). New York: The Macmillan Company.
- 1919. *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays* (PS). New York: B. W. Huebsch.
- 1921. *The Engineers and the Price System* (EPS). New York: B. W. Huebsch. 小原敬士訳『技術者と価格体制』未来社, 1962.
- 1925. Economic Theory in the Calculable Future. *The American Economic Review* 15 (1). Reprinted in ECO: 3-15.
- 1934. *Essays in Our Changing Order* (ECO). Edited by Leon Ardzrooni. New York: The Viking Press.